■編集後記

4年間付き合った学生を送り出し、新たな学生を迎える時期となりました。こんなサイクルを繰り返していると、年老いたことを忘れてしまいます。それが錯覚であることを示すように、体育研究室メンバーの平均年齢は55才をとうに越えていました。それにしては、みんな頑張っているだろうと自画自賛していることも事実です。愛知大学も他の私大と同様に、「大学氷河期」「全入時代」の到来に四苦八苦しています。学内を賑わせている文書には、「遊び」とか「楽しい」という言葉は全く使用されません。「遊びのプロ」として、遊びたい人に上手な遊びを教え遊びたくない人に遊びの素晴らしさを知らしめることを任としている体育教員にとっては、陰々滅々の感がしてなりません。一昨年に逝去された植屋教授の後任人事がストップしたままという事態も、一層寂しさを増幅させています。

卒業日　自由の鐘に　手を合わせ

原田康明先生（法学部教授）が、本年度をもって定年退職されました。喜ばしくもあり、淋しくもあり……非常に複雑な心境です。原田先生は、本学出身「初」のプロスポーツ選手（昭和30年、トンボ・ユニオンズ入団）であり、その後硬式野球部監督として活躍されました。正式に体育教員となった昭和46年からは、正確な名古屋弁を使い親しみ深い口調で学生たちを指導されました。体育教員が70才の定年を元気に迎えたのは、原田先生が「初」です。それは、原田先生の明朗快活な人柄と、継続的なゴルフ・トレーニングの賜物と言えます。原田先生、お疲れでした（拝礼）。私が原田先生と出会ったのは、昭和53年。その頃、多くの教員は、ホモ・モビィリティでした。豊橋と車道の両校舎を（片道2時間）行き来するのが当然の日々でした。車道校舎の授業を終えた教員たちの楽しみは、一杯飲みながらの歓談でした。私たちも例外ではありませんでした。原田先生、本当にご馳走様でした。車道校舎の周辺、今池や栄の歓楽街に昔の面影を見つけ出すのも難しくなっています。守衛さんに叱られながら夜遅くまで学生と研究室で飲んだことも懐かしい思い出となりました。昭和は遠くなりにけり。

春暮れて　男別れの　茶わん酒

現代のチャンピオン・スポーツを支えているのは、記録万能主義と勝利至上主義です。だから、その達成のためにはあらゆることを試みます。大学間競争の中にも、それに似た状況が見受けられます。ガラス張の明るいトレーニング施設、科学的トレーニング、記録を伸ばすスポーツ用具、疲れを軽減する飲み物や品々、神頼みとしてのお守り…何か忘れ物をしているような気がしてなりません。とにかく、最も空虚な結果は、何のためにやろうとしたのかを見失うことでしょう。ところで、学問体系や研究枠組の基本構造は、対象、方法、目的の3つです。調査をしたり実験をすれば、目論見と合致するか否かとは別に必ず結果が出てしまいます。対象の拡大、方法の進展の洪水によって目的が溺死していないか、時に再確認しなければならないようです。

学び舎や　満開花に　動き出し

（新井野）

愛知大学体育学論叢　第10号

2002年3月23日　印刷
2002年3月30日　発行

発行責任者　新井野　洋一

発行所　愛知大学体育研究室
〒441-8522 豊橋市町畑町1の1
TEL.（0532）47-4180 内線1405

印刷所　有限会社　三愛企画